御所市文化財調査報告書　第 43 集

奈良県御所（ごせ）市

櫛　羅　城　跡

－第 1 次発掘調査報告－

平成 24 年（2012 年）３月

御所市教育委員会

例　　言

1　本書は、移動通信用基地局設置工事に伴う事前調査として、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモの委託を受けて御所市教育委員会が実施した、御所市大字櫛羅 1106 番 2 及び 1107 番に所在する櫛羅城跡の第 1 次発掘調査報告書である。

2　調査の体制等は次の通りである。

調査主体　御所市教育委員会　　調査担当　御所市教育委員会
文化財課技術職員　金澤雄太

調査期間　平成 23 年 11 月 7 日～ 11 月 15 日　　調査面積　38 ㎡

3　現地での写真撮影、ならびに遺物の撮影は金澤が行った。

4　本書の執筆・編集は金澤が行った。

5　本発掘調査に関わる記録類および出土遺物は、御所市教育委員会文化財課にて保管している。

6　現地調査及び本書刊行にかかる費用は、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモがすべて負担した。関係各位にご理解、ご協力いただいたことを記し、深謝いたします。

目次

例言

１．位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

２．調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

３．各トレンチの調査成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

４．遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

５．総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

参考文献

図版

挿図　目次

図１　櫛羅城跡の位置・・・・・・・・・・・1

図２　周辺の主要遺跡分布図・・・・・・・3

図３　トレンチ配置図・・・・・・・・・・・5

図４　第１トレンチ土層断面図・・・・・・6

図５　第２・３トレンチ土層断面図・・・・7

図６　第１トレンチ出土遺物実測図・・・・9

図版　目次

図版１　1　第１トレンチ全景 (南から)

2　第１トレンチ北壁土層 (南から)

図版２　1　第１トレンチ西壁土層 (東から)

2　第１トレンチ東壁土層 (西から)

3　第２トレンチ北壁土層 (南東から)

4　第３トレンチ北壁土層 (南から)

5　出土遺物（S ≒ 1/3）

１．位置と環境

（１）位置（図１）

御所市は奈良県の中部に位置する面積 60.58km² の都市であり、北は葛城市・大和高田市、西は大阪府千早赤阪村、南は五條市、東は橿原市・高取町・大淀町に接している。市域の北部は低平な奈良盆地の西南端に位置し、西部には金剛・葛城山がそびえ、南東部には竜門山地西端にあたる巨勢山などの丘陵に跨る。地形的には、市の南に中央構造線がはしる、内帯と外帯の接する地域といえ、自然景のみならず人々の生活や風習等において奈良盆地と吉野山地との漸移・連結地帯をなしている。また、盆地各所への利便性もさることながら、西は金剛・葛城山の間にある水越峠を通じて大阪方面へつながり、南は風の森峠を越えて五條・吉野・和歌山方面へ至る、交通の結節地としても重要な役割を果たしている。

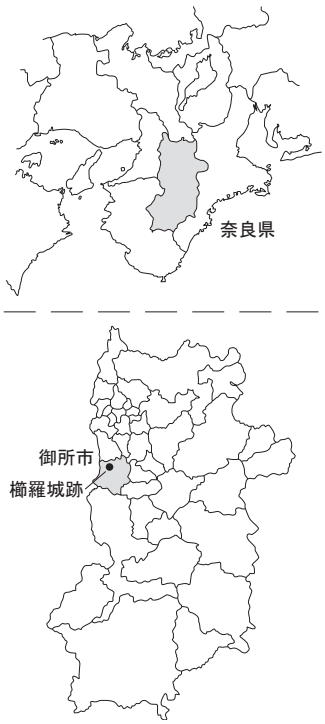


図１　櫛羅城跡の位置

（２）周辺の遺跡（図２）

御所市域では旧石器時代の遺跡は現状で確認されておらず、縄文時代になって初めて人類の痕跡を見出すことができる。明確な遺構が確認されている遺跡はそれほど多くないが、観音寺本馬遺跡や玉手遺跡において晩期の平地式住居や土器棺墓群が検出されるとともに（木許ほか 2009・2010、本村 2009）、伏見遺跡では中期末～後期中葉（廣岡・十文字 2005）、南郷遺跡地蔵谷地区では中期末～後期初頭の土器が多く出土しており（坂編 2000）、付近に集落の存在が窺われる。縄文時代の遺物の出土は山麓部を中心に比較的多く認められ、後期～晩期のものが多い中で前期に遡るものも少数ではあるが玉手遺跡などで確認されている（松田 1997）。

弥生時代の代表的な遺跡には鴨都波遺跡があり、遺構や遺物の豊富さから弥生時代を通じて営まれた拠点的大集落と考えられる（木許編 1992、藤田・尼子編 1992 ほか）。高地性集落では、巨勢山丘陵上に巨勢山境谷遺跡（藤田編 1985、木許編 2007 ほか）、巨勢山中谷遺跡（御所市教育委員会 1989）、巨勢山八伏遺跡（御所市教育委員会 1990）などが後期になって営まれることが知られている。また、名柄遺跡は外縁付鈕Ⅱ式の銅鐸と多鈕細文鏡の埋納地として古くから著名である（高橋 1919）。近年の発掘調査では、中西遺跡において約 20,000 ㎡以上の広がりをもつ水田遺構が確認された（奈良県立橿原考古学研究所 2011）。これは全国でも最大規模のものであり、中西遺跡周辺が有数の穀倉地帯であったことを示していると考えられる。

古墳時代に入ると、前期では鴨都波１号墳が著名である（御所市教育委員会編 2001）。一辺約 20 mの小規模な方墳ながら、４面の三角縁神獣鏡や方形板革綴短甲、漆塗りの鞆といった豊富な副

葬品が出土した。墳丘と副葬品に見られる格差は当該期の南葛城地域を考える上で重要な視点となろう。その他にも西浦古墳（梅原 1922）やオサカケ古墳（島本 1938）、巨勢山 419 号墳（藤田編 2002）などが前期の古墳として知られているが、資料状況が良くないこともあり鴨都波 1 号墳との関係を含めて十分に検討が及んでいない。

集落に関しては鴨都波遺跡において若干様相がわかっているものの（豊岡 1989、藤田・尼子編 1992）、その他の遺跡に関しては顕著な遺構は認められず、楢原遺跡において土坑からまとまった土器が出土している程度であった（藤田編 1994）。しかし近年の発掘調査によって、秋津遺跡から前期前半の方形区画施設や多数の掘立柱建物が検出され（米川・菊井 2010）、名柄遺跡から前期前半の住居や良好な土器群が検出されるなど重要な成果があがってきている（佐々木 2012）。

中期になると、突如として墳長 238 mを誇る大前方後円墳の室宮山古墳が築造される（秋山・網干 1959、木許編 1996、藤田・木許編 1999）。北側の周堤に接するネコ塚古墳という陪冢をもち（梅原 1922、関川 1989）、埋葬施設には長持形石棺を納めた竪穴式石室を有するなど南葛城地域の中でも隔絶した内容であり、その出現に対する歴史的評価は今後も慎重に議論していく必要がある。その後は、やや規模を縮小させながらも墳長 149 mの前方後円墳である掖上鑵子塚古墳が築造されるが（楠本編 1978 ほか）、その立地が曽我川流域へと移る点は先行する室宮山古墳との関係を考える上で注意が必要である。また、室宮山古墳の東側に位置する径約 50 mの円墳であるみやす塚古墳も、室宮山古墳との前後関係が難しいが興味深い存在である（網干 1959）。

中期の集落としては、金剛山東麓の扇状地上に広がる南郷遺跡が特筆されよう（坂編 1996 ほか）。広い範囲に居住・生産・祭祀の要素が散在しているとともに、渡来系要素の強い集落であり、葛城氏の支配拠点と考えられている。南郷遺跡内に所在する極楽寺ヒビキ遺跡では、室宮山古墳で出土した家形埴輪に類似する構造の建物跡が検出され、古墳に葬られた被葬者と集落との関係を考える上でこの上ない成果といえる（北中編 2007）。その他にも、名柄遺跡で首長居館と考えられる遺構が（藤田 1991）、鴨神遺跡において中期後半と考えられる道路遺構が確認されている（近江 1993）。

後期は大型古墳の分布が変化し、巨勢谷に大型の横穴式石室墳が築造されるようになる。主要なものとして、権現堂古墳（佐藤 1916、河上 2001）、新宮山古墳（奈良県教育委員会 1980 ほか）、水泥北古墳、水泥南古墳（網干 1961b ほか）があげられ、高取町域の市尾墓山古墳、市尾宮塚古墳なども含めて巨勢氏との関連が考えられる。地理的にはやや離れるが、巨大な横穴式石室をもつ條ウル神古墳も石室の型式が巨勢谷のものと類似しており、その破格の規模とともに注目される（御所市教育委員会編 2003）。

群集墳に関しては、総数 800 基を超える巨勢山古墳群（藤田編 1987）や葛城山東方の独立丘陵上に立地する石光山古墳群（河上ほか編 1976）、葛城山東側斜面の尾根上に位置する小林古墳群（藤田 1987）や石川古墳群（白石 1974）、吐田平古墳群（網干 1961a）、金剛山の東側斜面尾根上に位置する北窪古墳群（末永 1932、廣岡 2002 ほか）やドンド垣内古墳群（十文字編 2007 ほか）などが存在

1. 櫛羅城跡　2. 観音寺本馬遺跡　3. 玉手遺跡　4. 伏見遺跡　5. 南郷遺跡　6. 鴨都波遺跡　7. 巨勢山境谷遺跡
8. 巨勢山中谷遺跡　9. 巨勢山八伏遺跡　10. 名柄遺跡　11. 中西遺跡　12. 鴨都波１号墳　13. 西浦古墳　14. オサカケ古墳
15. 楢原遺跡　16. 秋津遺跡　17. 室宮山古墳　18. ネコ塚古墳　19. 掖上鑵子塚古墳　20. みやす塚古墳
21. 極楽寺ヒビキ遺跡　22. 鴨神遺跡　23. 権現堂古墳　24. 新宮山古墳　25. 水泥北古墳　26. 水泥南古墳
27. 條ウル神古墳　28. 巨勢寺　29. 二光寺廃寺　30. 朝妻廃寺　31. 高宮廃寺
A．巨勢山古墳群　B．石光山古墳群　C．小林古墳群　D．石川古墳群　E．吐田平古墳群　F．北窪古墳群
G．ドンド垣内古墳群

図２　周辺の主要遺跡分布図

する。これらの古墳群はおおむね古墳時代後期を中心とするものであるが、中期に築造が開始されるものや終末期にまで築造が続くものも存在している。このような状況から、金剛・葛城山東麓部は後期を中心に墓域として広く利用されていたと考えられ、それらの築造主体や古墳群間の関係等については今後の調査・検討が待たれる。

後期の集落については情報が少ないが、鴨都波遺跡や南郷遺跡で竪穴住居などの遺構が確認できており、集落が継続して存在していることがわかる（藤田・尼子編 1992、阪本編 2002 ほか）。ただし、集落の規模などはよくわかっていないため、今後の調査成果に期待するところが大きい。

古代には寺院の造営が盛んに行われている。伽藍配置が復元できるものは巨勢寺に限られるが（河上・木下編 2004）、近年の調査で新たに検出された二光寺廃寺（廣岡 2006）では、金堂と考えられる礎石建物の一部が検出されるとともに、その周囲から多量の塼仏や瓦が出土し、大きな成果が上がっている。その出土瓦の中には、近隣の朝妻廃寺（前園ほか 1978）、高宮廃寺（松田ほか 1993）の瓦と同笵のものがあり、密接な関連を有する可能性が考えられる。

（３）歴史的環境

櫛羅城跡は、室町時代の城館跡として周知の埋蔵文化財包蔵地とされており、大乗院門跡坊人であった倶尸羅氏の本拠地と考えられている。倶尸羅氏の出自に関する記録は定かでないが、至徳元年（1384 年）の『長川流鏑馬日記』中に、春日若宮祭の流鏑馬頭役を勤仕する願主人の一員として「拘尸羅殿」との記載がみられることから、この時期には既に有力在地領主として存在していたことがわかる。

大坂の役で倶尸羅氏が没落した後の城館跡には、徳川氏より一万石が与えられた永井氏が新庄より移って陣屋を築き、櫛羅藩が成立した。櫛羅藩は葛上・葛下・忍海の３郡にわたっていたが、陣屋のおかれた本遺跡の周辺は藩領の中でも枢要の地として栄えていたようである。

２．調査の経過

（１）調査にいたる経緯

櫛羅城跡が発掘調査に至った契機は、平成 23 年６月、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ　常務執行役員関西支社長　徳広清志氏から、御所市大字櫛羅 1106 番２及び 1107 番における移動通信用基地局設置及び出迎柱２本の建柱を目的とする発掘届（文化財保護法 93 条第１項）が提出されたことによる。

今回工事計画は、基地局アンテナ本体の基礎工事において深さ 2.4 mの掘削、２本の出迎柱部分において深さ２mの掘削、アンテナ周囲のフェンス部分において深さ 0.8 m前後、フェンス外側の植栽部分において深さ１m前後の掘削を行うものであった。このような内容から当市教育委員会は、発掘調査が必要であるとの意見書を付して、提出された発掘届を平成 23 年７月４日付で奈良県教

育委員会に進達した。対して、奈良県教育委員会から平成23年7月25日付で「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」があった。当市教育員会からの「発掘調査の通知」は平成23年10月12日付で提出した。

（2）発掘作業の経過

櫛羅城跡は今まで発掘調査がなされておらず、基礎的な情報が得られていなかった。本調査地は北東方向に延びる尾根の南側斜面に位置するが、現在は斜面を削りだした平坦地となっており、城館本体の位置からは外れている可能性が考えられた。しかし、城館に伴う周辺施設やその他の時代の遺構が存在する可能性が考えられたため、そのような遺構及び堆積状況の確認を目的として発掘調査を行うこととした。

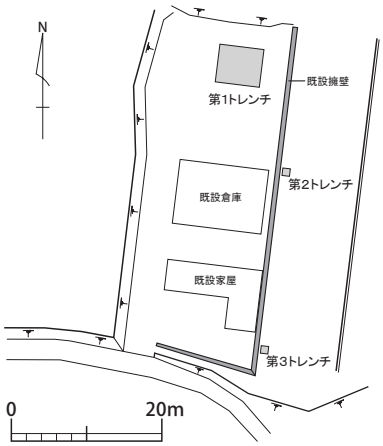


図3　トレンチ配置図

発掘調査にあたっては、基地局アンテナ本体部（以下、第1トレンチ）と2本の出迎柱部（以下、北側を第2トレンチ、南側を第3トレンチ）にトレンチを設定し、アンテナ周囲のフェンス及び植栽部に関しては第1トレンチの状況をみて調査の必要性を判断することとした（図3）。第1トレンチは重機と人力を併用し、第2・3トレンチは人力のみで掘削を行い、層理面での遺構検出に努めた。掘削の結果、各層位において遺構の存在は確認できなかったため、土層の堆積状況について写真・図面による記録を作成した。そのため、最終的にアンテナ周囲のフェンス及び植栽部の調査は不要と判断した。

以上のような経過をたどり、平成23年11月15日に現地での調査を全て終え、機材等の撤収を行った。

（3）整理作業の経過

調査終了後、直ちに報告書作成に向けての整理作業を開始した。出土遺物は細片がその多くを占めたが、若干でも器種等の情報を引き出せたものに関しては可能な限り図化の対象とした。

報告書の作成には各種ソフトウェアを使用し、遺物実測図の製図のみ製図ペンを用いて行った。

3．各トレンチの調査成果

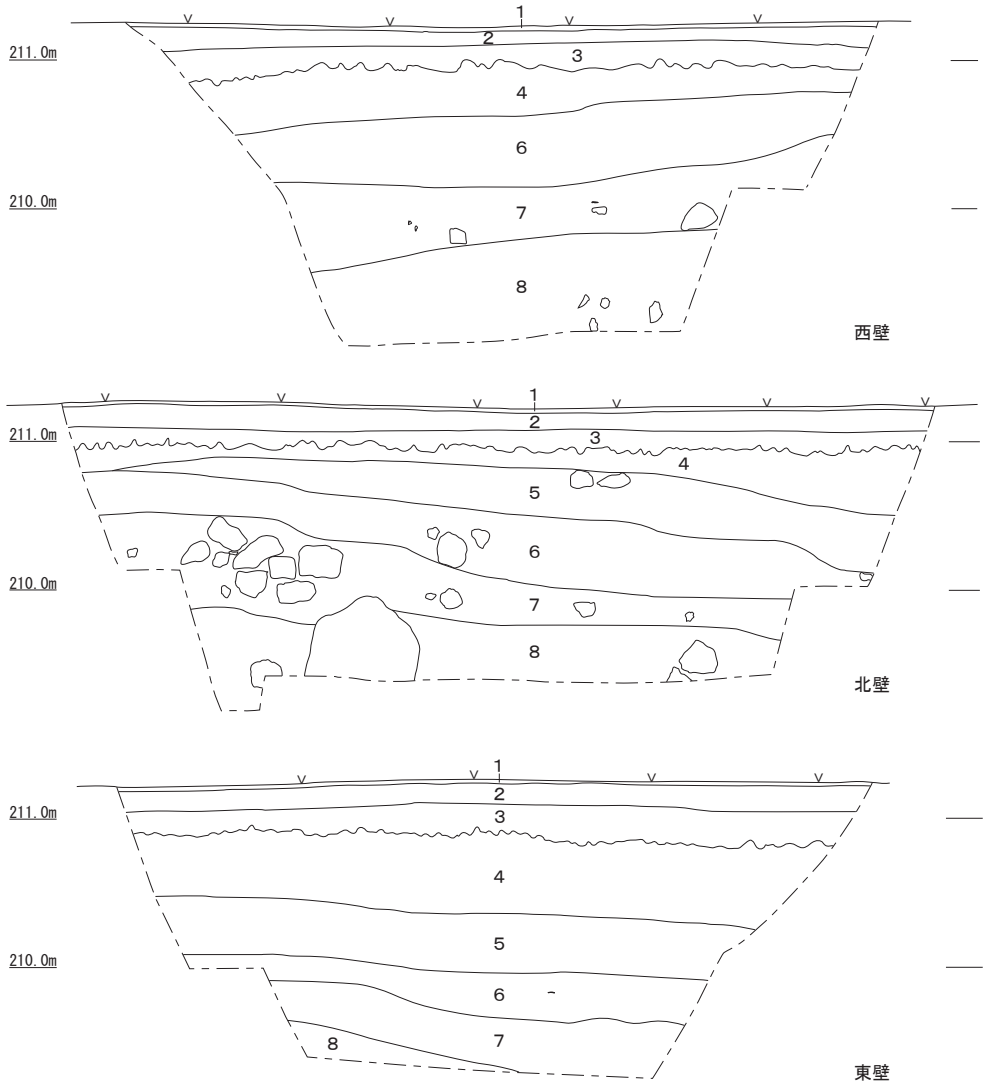
上述のとおり、今回の掘削範囲において遺構は存在しなかったため、トレンチごとの堆積状況を中心に述べていくこととする。

（1）第1トレンチ

工事予定掘削範囲に合わせて6.0 m ×6.0 mのトレンチを設定した。工事が及ぶ深さはおよそ2.4 mであったが、掘削時の危険性を考慮して約2.0 mの深さで掘削を停止した。

掘削の結果、表土下に７つの土層を確認した（図４）。２～４層は上から暗灰褐色（10～20cm）、灰褐色（10～25cm）、茶褐色（10～55cm）の礫質細砂であり、後述する下位の層が南東方向に傾斜しているのに対して水平に堆積していることから、耕作土等の人為的な層と考えられる。出土遺物としては土師器が多く 110 点、韓式系軟質土器１点、須恵器５点、不明鉄製品１点があるが、全て細片であり器種や時期などのわかるものは少ない。

５～８層は上から暗茶褐色（～40cm）、暗黄褐色（20～50cm）、黒褐色（20～65cm）、黄灰



第１トレンチ
１．表土　　５．暗茶褐色礫質細砂（花崗岩及びその風化礫を少し含む）
２．暗灰褐色礫質細砂　６．暗黄褐色礫質細砂（　　〃　　）
３．灰褐色礫質細砂　　７．黒褐色礫質細砂（花崗岩及びその風化礫を多く含む）
４．茶褐色礫質細砂　　８．黄灰褐色礫質細砂（　　〃　　）

0　2m

図４　第１トレンチ土層断面図

褐色（70cm 以上）の礫質細砂で、花崗岩やその風化礫を含んでいる。層全体が南東方向に傾斜して堆積していることから、北西側の高所から流れ込んだ土砂が堆積したものと考えられる。５～７層からは弥生土器 18 点、土師器 77 点、韓式系軟質土器４点、須恵器２点の破片が出土した。８層からの遺物の出土はなかった。掘削は任意の面で止めており、地山面は確認していない。

（２）第２トレンチ

北側の出迎柱建柱部に該当し、工事掘削予定範囲である 1.0 m ×1.0 mのトレンチを設定した。工事が及ぶ深さは 2.0 mであったが、トレンチの狭小さのため、深さ 1.0 mで掘削を停止した。

掘削の結果、表土下に３つの土層を確認した（図５上）。２層は第１トレンチの２層と類似し、同じく耕作土と考えられる灰褐色礫質細砂（10cm）である。

３・４層は第１トレンチの４・５層と類似した茶褐色（80cm）・暗茶褐色（10cm 以上）の礫質細砂であり、花崗岩等の入りかたも酷似しているため、高所からの流入土と考えられる。ただし、粘性に差が認められることから同一の堆積ではなく、異なる契機で複数回にわたって流入した土砂と考えられる。このトレンチから遺物は出土しなかった。

（３）第３トレンチ

南側の出迎柱建柱部に該当し、工事掘削予定範囲である 1.0 m ×1.0 mのトレンチを設定した。工事が及ぶ深さは 2.0 mであったが、トレンチの狭小さのため、深さ 1.2 mで掘削を停止した。

掘削の結果、表土下に５つの土層を確認した（図５下）。２層は第１・２トレンチの２層と類似し、同じく耕作土と考えられる灰褐色礫質細砂（10cm）である。

３・４層は第１トレンチの４・５層及び第２トレンチの３・４層と類似した茶褐色（20 ～ 40cm）・暗茶褐色（10 ～ 30cm）礫質細砂で、５・６層は第１トレンチの７・８層と類似した黒褐色（10 ～ 50cm）・黄灰褐色（40cm 以上）礫質細砂である。花崗岩等の入りかたも酷似しているため、それぞれ高所からの流入土と考えられる。ただし第１・２トレンチと異なり、層の傾斜方向が異なることから、北西高所のみからの流入ではない可能性も考えられる。そのためか、これら土層も他トレンチの類似する土層と粘性に差が認められ、同一の堆積ではなく異なる契機で流入した土砂と考えられる。

遺物に関しては３層から須恵器片１点が、４層からは土師器片１点が出土したが、器種や時期などのわかるものではない。

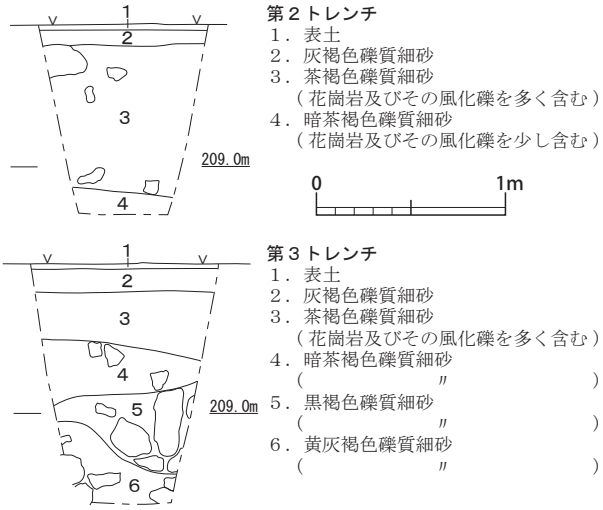


図５　第２・３トレンチ土層断面図

４．遺物

本発掘調査で出土した遺物は、全て包含層出土のものである。上述の通り細片が大半を占めるが、その中で器種等の判断が可能なものを図６に示した。

１は弥生土器甕の口縁部片で、復元口径 23cm、残存高 2.0cm を測る。頸部から口縁部へくの字状に強く屈曲し、内面に明瞭な稜線が存在する。端部は上下につまみ出されており、特に上方への拡張が顕著である。調整は内外面ともに丁寧なヨコナデが施される。２は弥生土器広口壺の口縁部片で、復元口径 14.6cm、残存高 1.6cm を測る。頸部から緩やかに外反し、端部は上下に引き出されている。調整は内外面にヨコナデが施された後に、口縁部外面には簾状文、上面には櫛描き刺突文が施される。３は弥生土器高杯の脚部片と考えられ、脚部外径 4.1 ～ 4.6cm、残存高 7.7cm を測る。柱状を呈すると考えられるが、直立するのではなくやや外開き気味である。外面裾部よりに縦方向のミガキと思われる痕跡が認められるが、全体的に調整は不明瞭である。内面はケズリではなくナデで仕上げられている。４は弥生土器甕の底部片で、底径 4.8cm、残存高 2.4cm を測る。外面調整は右上がりのタタキが底端部付近まで施され、一部にその上からユビオサエがなされている。内面の調整は不明瞭だが、板状工具があたった痕跡が認められる。

５は土師器高杯などの脚端部片と考えられ、復元底径 13.1cm、残存高 1.6cm を測る。円形の透孔が外面からの刺突によって穿孔されているが、何方向に穿孔されていたかは破片のためわからない。内外面ともに丁寧なナデ調整が施されている。

６は須恵器甕の体部片で、器壁の厚さは 0.8 ～ 1.0cm を測る。外面は全体に鉄分が銹着しているため不明瞭であるが、格子タタキの痕跡がわずかに認められ、内面は明瞭な同心円当て具痕が認められる。

７・８は韓式系軟質土器の体部片で、器壁の厚さは 0.7cm 前後である。小片のため正確な器種はわからない。外面に格子タタキの痕跡が認められ、内面には丁寧なナデが施される。

９は土師質羽釜の口縁部片で、小片のため口径は類例を参考にした任意のものである。頸部から強く外反し、端部は上方につまみ上げられている。調整は内外面ともに回転ナデで、外面は全面に煤が付着している。

５．総括

今回調査では、工事により掘削される基地局アンテナ本体部および２本の出迎柱部を対象として発掘調査を行った。発掘調査の結果、遺構は確認できず、耕作土と高所からの流入土と考えられる斜堆積の遺物包含層が確認できたのみであった。しかし第１トレンチ６・７層から、大和第Ⅲ～Ⅵ様式（藤田・豆谷 2003）という時期幅の広い弥生土器片が確認できたことで、北西高所における継続的な人間の活動を想定することが可能となった。この時期の集落は、本遺跡の周辺において今ま

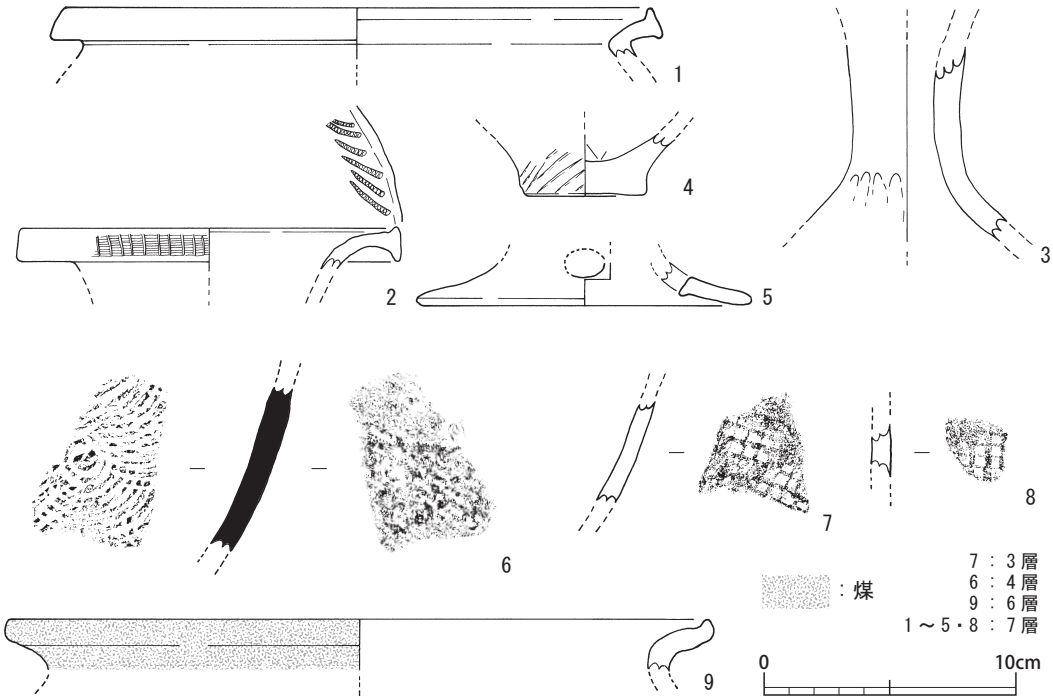


図6　第1トレンチ出土遺物実測図

で確認されておらず、今後周辺を調査する際は注意する必要があろう。また、同じく第1トレンチの複数の層から韓式系軟質土器の破片が出土した。周辺に古墳時代の集落は確認されていないが、金剛・葛城山東麓には古墳時代中期から後期にかけて渡来系要素の強い集落や古墳が多く営まれていることから、この周囲にもそういった集落の存在が考えられる。

肝心の城館に伴う遺構等は明確にならなかったものの、包含層出土遺物から遺跡周辺のあり様を類推する材料が得られたことは確実な成果といえよう。今後の周辺の調査で実態が明らかになっていくことに期待したい。

参考文献

秋山日出雄・網干善教 1959『室大墓』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第十八冊　奈良県教育委員会
網干善教 1959「御所市大字室　みやす古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第十二輯　奈良県教育委員会
網干善教 1961a「御所市森脇吐田平古墳群」『奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編）』第四集　奈良県教育委員会
網干善教 1961b「御所市古瀬「水泥蓮華文石棺古墳」及び「水泥塚穴古墳」の調査」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第十四輯　奈良県教育委員会
梅原末治 1922「大和御所附近の遺蹟研究」『歴史地理』第参拾九巻　第四號　日本歴史地理學會
近江俊秀編 1993『鴨神遺跡－第2次～第4次調査－』奈良県文化財調査報告書　第66集　奈良県立橿原考古学研究所
河上邦彦 2001「大和巨勢谷権現堂古墳の測量調査と副葬品（後期大型円墳の意義）」『実証の地域史－村川行弘先生頌寿記念論集－』大阪経済法科大学出版部
河上邦彦・亀田博・千賀久編 1976『葛城・石光山古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第31冊　奈良県教育委員会
河上邦彦・木下亘編 2004『巨勢寺』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第87冊　奈良県教育委員会
北中恭裕編 2007『極楽寺ヒビキ遺跡』奈良県文化財調査報告書　第122集　奈良県立橿原考古学研究所

木許　守編 1992『鴨都波　11 次　発掘調査報告』御所市文化財調査報告書　第 11 集　御所市教育委員会
木許　守編 1996『室宮山古墳範囲確認調査報告』御所市文化財調査報告書　第 20 集　御所市教育委員会
木許　守編 2007『巨勢山古墳群Ⅵ』御所市文化財調査報告書　第 30 集　御所市教育委員会
木許守・濱慎一・米田裕貴子・岡田圭司・佐々木健太郎・西村慈子 2009『京奈和自動車道関連遺跡発掘調査概報Ⅱ　平成 20 年度調査の概要』御所市文化財調査報告　第 35 集　御所市教育委員会
木許守・濱慎一・西村慈子・佐々木健太郎 2010『京奈和自動車道関連遺跡発掘調査概報Ⅲ　平成 21 年度調査の概要』御所市文化財調査報告　第 37 集　御所市教育委員会
楠本哲夫編 1978「御所市掖上鑵子塚前方部周濠発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報　1977 年度』奈良県立橿原考古学研究所
御所市教育委員会 1989『ゴルフ場開発事業に伴う　第 1 回　巨勢山古墳群発掘調査成果の現地説明会資料』
御所市教育委員会 1990『ゴルフ場開発事業に伴う　第 2 回　巨勢山古墳群発掘調査成果の現地説明会資料』
御所市教育委員会編 2001『鴨都波 1 号墳　調査概報』学生社
御所市教育委員会編 2003『古代葛城とヤマト政権』学生社
阪本晋通編 2002『鴨都波 16 次発掘調査報告－附．平成 12・13 年度　個人住宅建築に伴う市内遺跡発掘調査－』御所市文化財調査報告書　第 27 集　御所市教育委員会
佐々木健太郎 2012『名柄遺跡　第 6 次　発掘調査報告』御所市文化財調査報告書　第 41 集　御所市教育委員会
佐藤小吉 1916「權現堂古墳」『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』第三回　奈良縣
島本　一 1938「琴柱形石製品の新例」『考古學雑誌』第二十八卷　第六號　考古學會
十文字健編 2007『ドンド垣内古墳群』奈良県文化財調査報告書　第 119 集　奈良県立橿原考古学研究所
白石太一郎 1974「御所市石川古墳群」『奈良県の主要古墳Ⅱ』奈良県教育委員会
末永雅雄 1932「南葛城郡葛城村西北窪　和田山古墳」『奈良縣史蹟名勝天然記念物調査會抄報』第二輯　奈良縣
関川尚功 1989「室大墓古墳外堤部発掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報　1988 年度』第 2 分冊　奈良県立橿原考古学研究所
高橋健自 1919「南葛城郡名柄發掘の銅鐸及銅鏡」『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』第六回　奈良縣
豊岡卓之 1989「鴨都波遺跡第 7 次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報　1988 年度』第 1 分冊　奈良県立橿原考古学研究所
奈良県教育委員会 1980「新宮山古墳」『奈良県指定文化財－昭和 54 年度版－』
奈良県立橿原考古学研究所 2011『中西遺跡第 18 次調査～弥生時代前期水田の調査～』（2011 年 11 月 12 日　現地説明会資料）
坂　靖編 1996『南郷遺跡群Ⅰ』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 69 冊　奈良県教育委員会
坂　靖編 2000『南郷遺跡群Ⅳ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 76 冊　奈良県立橿原考古学研究所
廣岡孝信 2002「北窪遺跡」『奈良県遺跡調査概報　2001 年度』第三分冊　奈良県立橿原考古学研究所
廣岡孝信 2006「二光寺廃寺」『奈良県遺跡調査概報　2005 年』第二分冊　奈良県立橿原考古学研究所
廣岡孝信・十文字健 2005「北窪遺跡 2004 －第 1 次調査　伏見遺跡 2004 －第 1・2 次調査」『奈良県遺跡調査概報　2004 年』第二分冊　奈良県立橿原考古学研究所
藤田和尊 1987「御所市・小林遺跡の調査」『季刊明日香風』第 23 号　財団法人飛鳥保存財団
藤田和尊 1991「奈良県御所市名柄遺跡」『日本考古学年報』42（1989 年度版）　日本考古学協会
藤田和尊編 1985『巨勢山境谷 10 号墳発掘調査報告』御所市文化財調査報告書　第 4 集　御所市教育委員会
藤田和尊編 1987『巨勢山古墳群Ⅱ－御所市みどり台総合開発事業に伴う発掘調査 1 －』御所市文化財調査報告書　第 6 集　御所市企画課
藤田和尊編 1994『楢原遺跡Ⅰ』御所市文化財調査報告書　第 17 集　御所市教育委員会
藤田和尊編 2002『巨勢山古墳群Ⅲ』御所市文化財調査報告書　第 25 集　御所市教育委員会
藤田和尊・尼子奈美枝編 1992『鴨都波　12 次　概報』御所市文化財調査報告書　第 12 集　御所市教育委員会
藤田和尊・木許守編 1999『台風 7 号被害による室宮山古墳出土遺物』御所市文化財調査報告書　第 24 集　御所市教育委員会
藤田三郎・豆谷和之 2003「第 2 節　奈良県における土器編年」『奈良県の弥生土器集成　本文編』橿原考古学研究所研究成果第 6 冊　奈良県立橿原考古学研究所
前園実知雄・関川尚功・中井公 1978「御所市朝妻廃寺発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報　1977 年度』奈良県教育委員会
松田真一 1997『奈良県の縄文時代遺跡研究』財団法人由良大和古代文化研究協会
松田真一・近江俊秀・清水昭博 1993「御所市高宮廃寺について」『青陵』第 83 号　奈良県立橿原考古学研究所
本村充保 2009「観音寺本馬遺跡－京奈和自動車道（観音寺Ⅰ区）－」『奈良県遺跡調査概報　2008 年』第三分冊　奈良県立橿原考古学研究所
米川仁一・菊井佳弥 2010「秋津遺跡」『奈良県遺跡調査概報　2009 年度』第三分冊　奈良県立橿原考古学研究所

1　第１トレンチ全景（南から）

2　第１トレンチ北壁土層（南から）

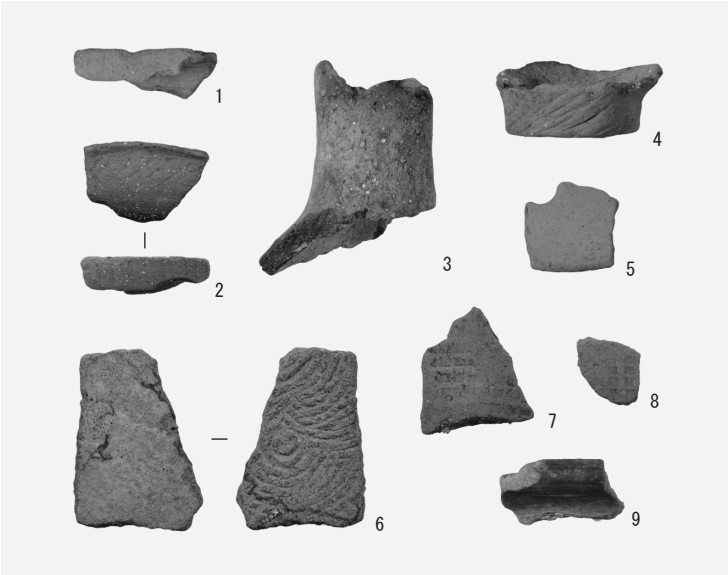
図版2

1　第1トレンチ西壁土層（東から）

2　第1トレンチ東壁土層（西から）

3　第2トレンチ北壁土層（南東から）

4　第3トレンチ北壁土層（南から）



5　出土遺物（S≒1/3）

報告書抄録

ふりがな	くじらじょうあと
書　　名	櫛羅城跡
副　書　名	第1次発掘調査報告
シリーズ名	御所市文化財調査報告書
シリーズ番号	第43集
編著者名	金澤雄太
編集機関	御所市教育委員会
所　在　地	〒639-2277　奈良県御所市室102番地　ＴＥＬ 0745-60-1608
発行年月日	2012年3月23日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
櫛羅城跡（くじらじょうあと）	御所市（ごせし） 大字櫛羅（くじら）	29208		34°　27′ 30″	135°　42′ 00″	20111107 ～ 20111115	38	試掘・確認 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
櫛羅城跡	城館	弥生・古 墳・中世	なし		弥生土器・土師器・韓 式系軟質土器・須恵器			

奈良県御所市

櫛　羅　城　跡

－第１次発掘調査報告－

御所市文化財調査報告書　第 43 集

平成 24 年（2012 年）３月 23 日

編集・発行　御所市教育委員会

御所市室 102 番地

印　　刷　株式会社　笹田印刷所

御所市今住 16 － 3